

偏見意識の源を探る

—古典における老い・障害・貧困等の描写から—

月 田 みづえ

はじめに

福祉の充実、障害ある人に対する差別の排除が求められているにもかかわらず、容易に実現しない。その原因を筆者は「日本人の福祉の心の欠除」と考えず、もっと深い、無意識の意識というものが根源にあるのではないかと考える。社会事業、社会福祉の歴史の研究は、社会・経済の動きなどいわゆる生活の下部構造がその時代の現実の生活にどう反映しているかに焦点が当てられ、分析されてきた。

その根源を究めるにはいくつかの筋をたどらねばならないが、本稿では、日本文化史に含まれる民衆の生活史をひもとくには対象が広大となるため、上代の文化史の中から、当時の民衆の生活・心をいきいきと歌い、描写している『萬葉集』『今昔物語』を中心に、今日いうところの福祉の対象となる人や事象がどのように考えられ、見られていたかに焦点をあてて捉えることにする。

『今昔物語』は、わが国最大の説話集であり、平安末期の1120年前後、白河院政の頃に成立したと言われているが、その成立時期は未だ明確ではなく、その編者(作者)も明らかでない⁽¹⁾。『源氏物語』の優雅な貴族生活と対照的な『今昔物語』の説話は、いずれも「今ハ昔、〈人名・事物名、あるいはそれに準ずるもの〉アリケリ」で始まっている。話は過去に存在したものと想定され、世間話という体裁で、さまざまな階層の人々のありようを描いた話と評価されている。⁽²⁾

登場人物は、男女の貴人、僧尼のみならず、山賊・海賊・あふれもの、乞食や人々の忌み嫌う最下層の「賤民」にまでいたっている。⁽³⁾「苦しくきびしい生活に耐えて強く生きぬく庶民、生きるための罪業におのの

きながら一途に救いの世界を求め続ける貧しい最下底の人間」等、特に編者の関心は社会の底辺の醜悪・汚濁の中に生きる者たちにむけられているという指摘もある。⁽⁴⁾

『今昔物語』『萬葉集』(7、8世紀)のほか、9世紀に薬師寺の僧景戒が著した『日本霊異記』や『古今和歌集』(10世紀初め)あるいは『発心集』(13世紀初期)等からも素材をとりあげた。

これらの作品集は永いもので1200年以上にわたって語り継がれており、そこに述べられた事象はその後の日本人のものの考え方を規定するものとなっている。いずれも上代における作品であり、そこには当時上層知識階級の生活に深く取り込まれた仏教思想が作品の背景となっている。従って仏教思想が広く中・下層階級へと浸透するにつれ、これらの人々の日常生活あるいは日常のものの考え方に強大な影響を及ぼした。その思想が老人、障害者、貧困者や親子の関係に対してどう反映しているかを考えてみる。

1. 老い・老人観

『今昔物語』には、老いや老人観を扱った話が十数篇載せられている。

まず人間の老いについての見方は、「悉達太子、城に存りて楽を受けたまふ語、第3⁽⁵⁾」で述べられている。新婚・遊楽の人間の華やかな生活において、満たされない悲しみをいだく悉達太子が浄居天の仮の姿によって老・病・死の三つの人間苦を見聞し、人間誰しも避けられないものと知り、出家の意味を教わるという劇的な構成の話である。

そこには老いが次のように描かれている。

「浄居天、変化して老いたる翁と成りぬ。頭白く、背偃にして、杖に懸りて羸れ歩ぶ。太子、此を見給ひて、御共の人に問ひて宣はく、「此は何人ぞ」答へて云はく、「此は老いたる人也」。又、問ひ給はく、「何を老いたると云ふぞ」と。答へて云はく、「此の人、昔は若く盛なりき。今は齢積りて形衰へたるを老いたる人と云ふ也」と。太子、又問ひ給はく、「只此の人のみ老いたるか。万の人皆此く有る事か」と。答へて云はく、「万の人皆此く有る也」と。

老いについて、憐れで惨めな避けることのできない人間苦として描かれ、生き生きとした正常な姿としては、扱えられていない。

このような老人に対する見方は、『萬葉集』にも相通ずるものがみいだせる。

「世間の すべなきものは 年月は流るごとし
とり続き 追ひ来るものは 百種に迫め寄り来る 娘
ら が 娘さびすと 韓王を 手本に巻かし よち子
らと 手たづさはりて 遊びけむ 時の盛りを 留み
かね 過ぐしやりつれ 蜷の腸 か黒き髪に いつの
間か 霜の降りけむ 紅の面の上へ いづくゆか 皺
が来りし ますらをの 男さびすと 剣大刀 腰に取り
佩き さつ弓を 手握り持ちて 赤駒に 倭文鞍うち
置き 這ひ乗りて 遊びあるさし 世間や 常にあり
ける 娘子らが さ寝す板戸を 押し開き い通り寄
りて 真玉手の 玉手さし交へ さ寝し夜の いくだ
もあらねば 手束杖 腰にたがねて か行けば 人に
厭はえ かく行けば 人に憎まえ 老よし男は かく
のみならし たまきはる 命惜しけど 為むすべもな
し」⁽⁶⁾

老醜は身に襲いかかり、みんなあつという間に老いさらばえて 杖をあてがいあつちに行けば人にいやがられ、こっちに行けば嫌われる、老人とはこんなものであるらしいと歌っている。

『古今和歌集』にも「も、ちどり さへづる春は物ごとに あたまたれども われぞふりゆく⁽⁷⁾」と春になってすべてのものが新しくなるが、自分だけは老い

ゆく者の悲哀を味わねばならないという歌がある。

老いを醜く 悲しいものとする見方が目につくが、老人の扱いについてはどのようなであろうか。

棄老思想である姨捨山の話は、最も古くは『大和物語』に載っており、同様の話が、『今昔物語』、『無名抄』、『袖中抄』等にもあり、よく知られている。⁽⁸⁾

信濃国更科に年老いた姨母（母の姉妹をいう一和名抄）を家に置き、親のように養っている者がいた。妻はこの姨母を非常に嫌い、夫に性悪だから深い山に捨てて欲しいと頼む。男は姨母を背負い、高い山の高い峰に登り、降ろして逃げ帰る。その夜明るい十五夜の月照りに眠れず、「わが心なぐさめかねつ さらしなや をばすて山にてる月をみて」と口ずさみ、思い慕って連れ戻り、養ったという話である。⁽⁹⁾この歌は、『古今和歌集』にあり、『今昔物語』が編まれたと想定される12世紀まで語りつがれていたことが分かる。さらに、「をばすて山」はその後も、江戸時代から現代まで詩歌、俳句、文学作品の題材として好んで用いられている。

『今昔物語』には、先の話の他、天竺編にも棄老の話が載っている。

天竺に、年が70を過ぎた老人を他国に流し遣ることを定めとしている国があった。年老いた母を流すこと耐えがたいという親孝行の大臣がいた。親を家の片隅に隠まっていたが、敵国が国王にさしむけてきた諸々の難問に、この大臣は母の知恵を借りて答えた。敵国は、賢人の多い国と考え友好関係を結ぶこととし、国王は老人のおかげと知って、老人を捨てず養う国に改めたという話である。⁽¹¹⁾この類話は『枕草子』にも見られる。⁽¹²⁾

これらの話は、インド、中国で語りつがれ、古く仏教とともに伝来し、孝養教訓話として、多方面で語りつがれたのではないかとみられる。

この話には、老いを憐れとみるだけでなく、老人の積年の知恵に対する評価が含まれている。後者の側面を描くものには、「天竺の施楼摩和尚、所々を行きて

僧の行を見る語、第九」¹¹³『今昔物語』(同様の話「達磨天竺僧の行みる事」¹¹⁴ - 「宇治拾遺物語」)がある。

天竺の陀楼摩和尚が行脚し、多くの比丘の所行をみるに、ある寺で80歳ほどの老比丘二人が碁を打っている。他の比丘は二人が若い時から碁ばかり打っているため軽蔑していた。しかし、二人の古老によれば、黒石が勝つ時は煩悩がまさり、白石が勝つ時は菩提がまさり、我が身の無常を観じているうちに悟りの境地に達していた。和尚は二人が人に称賛されることなくひたすら修業を積んでいたことの尊さを説くが、この話は、若いものからみれば無為で価値のないことをしている存在のように見えるが、内面的には精神的な修業を積んだ老人の姿を描いていると言える。

このように老いに対する相反する見方があらわれているようであるが、いずれにしても棄老せざるを得なかった現実が、いかに厳しいものであったかは、貧しい老人の話が多いことから裏づけられよう。例えば、極貧で病気の老母は迦葉尊者に腐った米汁を布施することで天上界に生まれ変わっている。(「老母、迦葉の教化によりて、天に生まれ恩を報ぜる語、第6」¹¹⁵) また、天竺にいた一人の貧乏な老人は、出家して仏弟子になろうと望むが、多くの仏弟子に前世に善根が無いという理由でことわられる。釈尊が遠大な過去のかすかな善根を指摘し、慈悲心で出家させる話もある。(「翁、仏の所に詣りて出家せる語、第27」)¹¹⁶

すなわち老親扶養のできる家では、老親は子の孝行に期待しつつも、一般的に老人の生活は貧しく、その現実から逃れるには、仏の道を信じる以外に方法はない。老いについても、先の話のように80歳という当時としては架空の存在に近い超高齢者が悟りをひらいて初めて尊重され、あるいは稀なる知恵によってその存在が認められるように、いわば寓話として老人が尊敬された。このような特殊な例を除くと一般的には、悲しくはかない人間苦と捉えられていたと言える。

2. 障害者観

障害者に対する見方にも、老人に対すると同様の思想が根底にある。

第一には、因果応報、前世の報いで障害者になったという考え方。第二は、障害者に慈悲の心をかけることによって自ら仏の道にはいることができるという考え方。第三に、障害者なるがゆえに一芸に秀でた者がいるという話である。

第一の考え方をあらわす説話は数多く、例えば、「信濃国の盲僧、法華を誦して両の眼を開く語、第18」¹¹⁷、「備前国の盲人、前世を知り法華を持する語、第19」¹¹⁸、「僧長義、金剛般若の験により盲の眼を開くこと第33」¹¹⁹などすべて、仏の教えを守り前世の報いを償ったために障害者でなくなったというものである。「¹²⁰舎衛国の鼻¹²¹欠猿、帝釈を供養する語、第23」は、その象徴的なものである。

天竺の舎衛国の山の一本の大木に千匹の猿が住んでいた。999匹には鼻がなく、1匹だけ鼻があった。多くの鼻なし猿が1匹の鼻あり猿をかたわ者と笑い嘲ける。999匹の鼻なし猿の供養を帝釈天は受けず、1匹の鼻あり猿の供養のみ受けた。その理由はいずれの猿も前世の因果で、999匹の猿は仏法をそしり、鼻のない身として生まれ、1匹の猿は善根功德で5体満足ながら愚痴で師を疑ったため猿の身となったものである。懈怠・放逸なる衆生が、精進・持戒の人の悪口をいうことを戒める話である。鼻のある猿が多数の中の少数として障害者としてののしられ、障害者という見方が相対的なものであるという考えと、障害が因果応報の結果という考えを明確に描いている点で興味深い。類話は、素朴な願いを仏に託する民間信仰として、早くも「日本霊異記」¹²¹にみいだすことができる。

例えば「両眼めくらの女が薬師仏の木像を信仰し、眼があいた話、第11」がある。

奈良の都の越田の池の南、蓼原の仏堂に薬師如来の木像があった。称徳天皇の世に、その村に両眼とも見

えない女がいた。7歳の女の子をもつ、大変貧しい未亡人であり、飢死しそうだった。女は、前世からの宿業によりこうなったので現世の報いだけでない。空しく飢死するより仏道を修めて、仏に祈ろうと考えた。薬師仏の像に向い、「命が惜しいのではなく、ただただこの子の命が惜しいのです。すぐに二人とも命つきてしまいそうです。どうかわたしに眼を下さい。」と願った。檀家の者が親子を哀れみ、戸をあけ中に入れておがませた。二日後、子が像の胸から桃のやにのような物が垂れるのをみつけ、母に知らせる。母が口に入れるように言うと、味は美味で、急に目もあいた。真心から願ひごとを立てると必ずかなうことが分かった。不思議な物語としてしめくくられている。(『今昔物語』にも引用されている)²⁰ この他、「聾者が大乘經典に帰依して、現世に報いを得、両耳が聞えた話第8」、「めくらの男が千手観音の日摩尼手をとなえて、眼があいた話、第12」、「めくらになった僧が(仲間を集め)金剛般若経を読ませて、眼をあけることができた話 第21」等、大同小異である。

第二の見方をあらわすものとして、癩(ハンセン)患者に慈悲心から法師がうみをなめて治す話がある。法師は、患者も自分も共に不浄の身であり、自分だけ清浄な身と思い、他の者を汚するのはきわめて愚なことと言い病人の体を舐めて治した。病人は、法師をためすために身を変じていた菩薩であった。(玄奘三蔵、²¹天竺に渡りて法を伝へ帰り来る語、第6)」

『発心集』の「真浄房、暫く天狗になる事」にも癩(ハンセン)患者と思われるものに対する描写がある。鳥羽の僧正とその弟子、真浄房と言う僧がいた。真浄房が師に、月日がたつにつれ後世が恐しく、修学の道を捨て、遁世者として法勝寺の三昧僧を志す旨申し上げた。本意のように三昧僧となる。隣の坊の観泉坊は、同じく後世のことを思い、勤め異なり地藏を本尊として、諸のかつたる(かたいの変化した語である。乞食者。癩人を俗にいひ習う。一和字正産鈔卷二。ここでは癩(ハンセン)患者をさすと思われる)をあわれみ、

朝夕物を取らす。真浄房は、阿弥陀を愚^{たの}み奉り、極樂を願って、乞食^{こつじき}をあわれみ、乞食が争って集まる。二人の道心者は、まじかで垣一つへだてているが、各々習慣となって、かつたぬもこなたに現れず、また、乞食も隣りへ物乞いをしない。というように二人の僧は、信仰は異ってもそれぞれ慈悲の心でかつたぬや乞食をあわれんだというものである。²⁴

第三の見方は、「源 博雅朝臣、逢坂の盲の許に通う話 第23」にあらわれている。醍醐天皇の皇子の兵部卿の親王の子で源 博雅朝臣という者がいた。万事にすぐれていたが、なかでも管絃の道に奥義を極めていた。その頃、逢坂の関に、一人の盲人が庵を造り住んでいた。蟬丸といい、もと敦実親王の雑色^{ざうしき}(蔵人所や院・御所などに属し、雑役を務めた無位の役)であった。蟬丸は多年、官の弾かれる琵琶を耳にし、上手になったが盲目となったため、「世の中はとてもかくても過ごしてむ官も薬もはてしなければ」と詠じ、ひっそり暮していた。源 博雅朝臣は、琵琶の道を一途に好み、身分の賤しい蟬丸の芸に魅せられ、三年間、夜な夜な盲人の庵のあたりに出かけ、心通じあえる機会を待ちつづけ、盲人が趣きのある夜、音楽の道に心得ある人に会いたいと独り言を言った時、声をかけ、秘曲を伝授してもらうという話である。「すべて芸の道は、ただこのように一途に好むべきものであるが、今の代に諸道に達人が少なく、感にたえない」と記し、盲目の琵琶が世間にはじまったと語り伝えたとしめくくられている。²⁵

このように、老人、障害者に対する見方は、共通して極く稀に修業を積んだもの以外は、あわれみの対象である。

3. 貧困観

生活苦としての貧困や盗人を扱った説話は数多く、『今昔物語』の主なテーマと言っても良い。

貧困者が布施をして仏に供養したために、富貴になる話は多くあり、例えば、塵ほどの貯えもなく、都城

中の九億の家々に物乞いをして命をつないでいる極貧夫妻は、ふたりの間にある唯一の麻の着物を仏の御弟子に供養し、国王の命により富貴となる話（舎衛国の勝義、施に依りて富貴を得たる語、第32²⁸）などがある。

老いを迎えた今でもなお、極貧にあって、たった残り一つの財産を供与し、功德すれば救われると説くのである。豊かになるも貧しくなるも前世の個人の努力・精進の賜物であり、個人の責任として貧困が捉えられ、政治・経済に原因があるとみる見方はない。さらに、現世の日常生活の中で、仏の道にそむくか報われる機会となるのかは、常に試されているのであり、ひたむきに努力せよと説くのである。

『今昔物語』より遅く成立した『発心集』には、62篇中10篇が乞食^{こじき}をテーマとしたものである。

これらの作品から「貧しさ」についても三点の見方が抽出できる。

第一は、人間苦でありながら、それを受容し、自分の心の持ちようによっては、悟りをひらき極楽浄土へと導かれることのできる修業の過程という考え方である。『発心集』の「江州増髪^{まじてのみま}の事」²⁷などがその例である。

近江の国に乞食をする翁があった。見る事聞くことにつけて「まして」とのみ言うために、「ましての翁」と名付けられた。聖が翁にどのような修業かと問うと、飢えた時は餓鬼の苦しみを思えば、「まして」（私のそれ以上）と考え、また、寒さ熱さについても寒熱地獄を思い「まして」と考える。おいしいものを味わっても現実の味に天の甘露を覲じ、この世にあるものは、いくら素晴らしくても極楽浄土のものは、ましてよいであろうとこの世の楽しみにふけらないと答えた。ここには、もっと苦しい窮遇を思い、あるいは極楽以外に良いことはないと思ひこませることで民衆が貧しさに耐えしのぶことを欲する為政者の意図をうかがうことができる。

貧困が前世の因果という考え方は、10世紀頃の作品

と思われる『宇津保物語』にもみいだせる²⁸。

阿闍梨はこれを聞いて、さてはこの女乞食は、昔一条の北の方と言った人だとわかった。この女乞食はかつて、罪もない継子に無実の罪をきせ、亡きものになようという恐ろしい心を持った。その報いによって今日このような身になったのである。「来世では、地獄の底に沈んで、浮ぶ事は出来ないであろう」と言うと、乞食は涙を流して、後悔するにつけ、焰に焼かれるように苦しいとその気持を述べる描写がある。

第二に慈悲の対象という捉え方である。

『発心集』の「叡実、路頭の病者を憐れむ事」²⁹（『今昔物語』の「神名の叡実持経者の語第35」³⁰の類話である）という話は、比叡山の叡実阿闍梨が、帝の病氣を見舞いに参内する途中、病にたおれた乞食を介抱し、宮中に行かなかった話である。叡実は、君を祈禱しようとするものは、いくらでも召集できようが、病者は自分が捨て去れば他に助けるものもなく、今にも命をおとすであろうとどまったのである。稀にみる尊いこととして描かれている。

第三は、第一に通ずるが、乞食^{こじき}をする修業僧の話であり、これも多い。当時乞食とは托鉢を意味していたと思われるが、後に、修業の意味が消え、方丈記の頃には、物もらい、こじきをさすようになる。先に触れたように『発心集』には、乞食に関する話が多く、物狂い（狂人）のようななりで子ども達に嘲られながら徘徊する人が徳を隠した人であった話や比叡山天台・真言の祖師が発心し、世の無常を思い、故郷を離れて門乞食をして、名利を捨てて命終える話等がある。

一方、『萬葉集』の山上憶良の歌として有名な貧窮問答は、よりありのままにやるせない思いで貧しさを捉え、仏教の教えや「格別に短い物の端をさらに切り詰める」という諺が、無理なものであると評する人間味溢れる歌である。

「風交り 雨降る夜の 雨交り 雪降る夜は すべもなく 寒くあれば 堅塩^{かたしほ}を とりつづしろひ 糟湯酒^{かすどけ} うちすすろひて しはぶかひ 鼻びしびしに

しかとあらぬ ひげ搔き撫でて 我れおきて 人はあらじと 誇ろへど 寒くしあれば 麻衾^{あさふすま} 引き被り^{かがふ} 布肩衣^{ぬのかたぎぬ} ありのことごと 着襲^{きしゅう}へども 寒き夜すらを

我れよりも 貧しき人の 父母は 飢え寒ゆらむ 妻子^{めしこ}どもは 乞ふ乞ふ泣くらむ この時は いかにつつか 汝が世は渡る^{ぬがよはわたる}」(風雨に雪まじる寒い夜、堅塩をかじり糟汁をすすり、咳きこみ鼻をぐずぐずさせながら、おれほどの人物は他にないと力むが、寒くてしかたなく、ありったけのものを着重ねるが、それでも寒く、自分よりもっと貧しい人の父母や妻子は、さぞひどじかろうに。こんな時、どのようにしてそなたはこの世をしのいでいるのか。)という問に対し、「天地^{あめつち}は 広しといへど 我がためは 狭くやなりぬる 日月^{いつしつ}は 明しといへど 我がためは 照りやたまはね

人皆か 我のみやしかる わくらばに 人とはあるを 人並に 我れも作るを……」と人並みにせせと働いているのに自分だけが日の目をみないのか、あるいは世の人みんながそうなのかと社会に思いをはせ、先に述べた諺のような「里長^{さとなが}が声は 殺屋^{ころや}処^{どころ}まで 来立ち呼ばひぬ かくばかり すべなきものか 世間の道^{よのなか}」と疑問をいだいている。さらに「世間を 厭^{いと}しと 恥^{はづか}しと 思へども 飛び立ちかねつ 鳥にしあらねば^と」と俗世解脱のための知恵を鳥にたとえた仏教の教えに対し、私ども人間は所詮鳥ではないものという抵抗感をあらわしている。⁹¹⁾

この後に、仏教の教えにより人心を治めようとする考え方は、益々強化されていくが、打解策のない厳しい現実の中で、一般庶民の心を歌う知識階層の眼が、「萬葉集」に盛りこまれている点で、注目に値する。

4. 親子関係に関する説話

親子関係においても前世の報いや法華經に祈ること救われる話が数多くある。

「阿育王の女子の語 第14」(二人の子どもが仏に供養した善根により、百年の後、転輪聖王、阿育王と生まれ変わり世を治める話)や「貧しい女の捨子を取り

養う女の語 第43」(貧乏女が生活苦から子を捨てたため、慈悲心からゆずり受けた高齢の女性が祈りによって乳がでるようになり、養育てたという話)等である。前世の定めは絶対的なものと考えられている。例えば「波斯匿王の娘善光女の語 第24」では、父王・母后が善光女というひとり娘を大切に育てていた。しかし、親は善光女を心から大切なものとして育てるが、善光女は、私の現在は前世からの定め故であり、親の愛を格別嬉しく思わないと言う。親は怒り乞食男を召し寄せ、善光女を王宮から追い払う。しかし福は衰えず、王も善悪の果報はすべて前世の定めと思い知るようになったという話さえある。⁹²⁾

『日本霊異記』の「女がみだりに男に通じ、子供に乳を飢えさせたために現報を得た話第16」⁹³⁾も前世に幼い子供をかまわず、みだりに男に通じ子供を乳に飢えさせた罪で、乳がはる病になる報いをうけた話である。

このように親の愛情より前世の因果が勝るという考え方は、次のような二つの話に相通ずるものがある。

一つは「幼児 瓜を盗んで父の不孝を蒙る語 第11」⁹⁴⁾では、親が七、八歳のむすこが一つの瓜を盗み食べたことを咎めて町の人々の連判のもとに勘当する。その後少年はある屋敷奉公中に盗みをはたらき捕えられ、検非違使が親を処置すべきというと、親は勘当した子であるという証拠をみせて、責任を免れた。親が子供を愛することはたとえようもないものであるが、かねてから子供の心ばえを知る賢い親として賛えられたという言い伝えである。

もう一つ、子どもに情をかけるより親自らの身の処し方に賛美が寄せられる話として次のようなものがある。

「女 乞食^{こがし}に捕えられ子を棄てて逃げる語 第29」⁹⁵⁾では、乞食におそわれた子供を背負った若い女が、子どもを人質に置いて逃げ、出会った武士達を連れて戻るが、すでに子どもは命絶えている。子供はかわいいに違いないが、乞食には肌をゆるすまいと思って逃げ

たことについて「下賤の者の中にも恥を知る者がいる」と語り伝えたとしめくくられている。

親のエゴが因果応報という仏教の教えで説明され、承認されているような話である。一方、『萬葉集』の有名な歌「瓜食めば 子ども思はゆ 栗食めば まして 恩はゆ いづくより 来りしものぞ まなかひに もとなかかりて 安寐し寝さぬ」や「銀も 金も玉も何せむに まされる宝 子にしかめやも」⁹⁸に通ずるような話も載っている。「土佐守紀貫之、子を思い和歌を詠む語 第43」⁹⁹は、土佐守となった紀貫之が、7、8歳になる子を病いで亡くしてしまう。都へと思ふ心のわびしきかはへらぬ人のあればなりけりと館の柱に書きつけるが、上京しても悲しみの心は消えなかったと語り伝がれている話である。

すなわち、『今昔物語』には、仏教説話を中心としながらも、人間的な世俗話がもりこまれ、仏教の教えと厳しい生活の現実の中での人間の情との葛藤が描き出されていると捉えられよう。とくに、親子の関係については、家族が確立されていない時代であり、婚姻制度や家族制度に踏みこんだ検討が別の面からなされるべきと考える。

註

- (1) 馬淵和夫他訳『今昔物語集一』（日本古典文学全集21）、小学館、1976年7月、9頁
- (2) 同前書、14頁
- (3) 氷積安明他訳『今昔物語集1 本朝部』（東洋文庫80）、平凡社、1985年6月、18頁
- (4) 前掲『今昔物語集一』（日本古典文学全集21）、18頁
- (5) 国東文磨訳『今昔物語集（一）』（講談社学術文庫305）、講談社、1987年12月、57～76頁
- (6) 青木生子他校注『萬葉集二』（新潮日本古典集成）、新潮社、1978年11月、53頁、特に老いに関する記述の傍線は筆者。

むすびにかえて

以上みてきたように、今日の老人や障害者に対する見方は、科学的な知識や遺伝に対する考え方の進展などにより、古典時代の見方とはかなり隔りがある。しかし、根源的なところでの偏見、差別観は今まで述べてきた諸作品の生まれた時代の見方、考え方に影響されている面はぬぐいきれないと考える。

老い、障害、病い、貧困等の人間苦はすべて個人の責任として前世の因果あるいは日常の行いの結果としてとらえ、どのような極貧者であっても、唯一の財産でも供養すれば救われるという、現実にはありえないことが教訓話として語り継がれたのである。

すなわち階層にかかわらず仏の道を信じることですべての人に救いの道が開かれるという仏教思想は、現実の社会においては、解決策と結合しない限り、より下の階層のことを見て、考えて、耐えしのぶことを説く、世を治めるための論理として活用されることとなったと言えよう。この仏教の基幹的考え方「因果応報」が、今日なお根強く残る差別思想の根源の一つと考えるゆえんである。

（つくだ みづえ：昭和女子大学短期大学部

専任講師）

- (7) 安田喜代門他『古今和歌集』、中興館、1929年10月、94頁、読人知らずの歌
- (8) 穂積陳重『隠居論』、日本経済評論社、1978年8月、80頁
- (9) 氷積安明他訳『今昔物語集6 本朝部』（東洋文庫120）、平凡社、1988年12月、165～167頁
- (10) 佐迫梅友訳『古今和歌集』（岩波文庫169～170）、岩波書店、1927年11月、166頁、読み人知らずの歌
- (11) 国東文磨『今昔物語集（五）』（講談社学術文庫309）、講談社、1988年5月、336～340頁
- (12) 同前書、350頁

- (13) 国東文磨『今昔物語集(四)』(講談社学術文庫308)、講談社、1988年5月、99~104頁
- (14) 渡辺綱也校訂『宇治拾遺物語下巻』、岩波書店、1988年4月、42~44頁
- (15) 国東文磨『今昔物語集(二)』(講談社学術文庫306)、講談社、1987年3月、55~61頁
- (16) 前掲『今昔物語集(一)』(講談社学術文庫305)、259頁
- (17) 前掲『今昔物語集1 本朝部』(東洋文庫80)、265頁
- (18) 氷積安明他訳『今昔物語集2 本朝部』(東洋文庫89)、平凡社、1987年1月、47頁
- (19) 同前書、71頁
- (20) 前掲『今昔物語集(五)』(講談社学術文庫309)、283~287頁
- (21) 原田敏明他訳『日本霊異記』(東洋文庫97)、平凡社、1987年11月
- (22) 同前書、178~179頁
- (23) 国東文磨『今昔物語集(六)』(講談社学術文庫310)、1983年11月、96~109頁
- (24) 三木紀人校注『方丈記 発心集』、新潮社、1979年7月、112頁~113頁
- (25) 氷積安明他訳『今昔物語集4 本朝部』(東洋文庫104)、平凡社、1987年1月、143~146頁
- (26) 前掲『今昔物語集(一)』(講談社学術文庫305)、288~296頁
- (27) 前掲『方丈記 発心集』、127~129頁
- (28) 伊藤カズ『宇津保物語全訳上』、明治書院、1966年5月、250~251頁
- (29) 前掲『方丈記 発心集』、174~176頁
- (30) 前掲『今昔物語集1 本朝部』(東洋文庫80)、201~207頁
- (31) 前掲『萬葉集二』、90~91頁
- (32) 前掲『今昔物語集(二)』(講談社学術文庫306)、160~168頁
- (33) 前掲『日本霊異記』、186~188頁
- (34) 前掲『今昔物語集6 本朝部』(東洋文庫120)、37頁
- (35) 同前書、92~94頁
- (36) 前掲『萬葉集二』、52頁
- (37) 前掲『今昔物語集4 本朝部』(東洋文庫104)、185~186頁